

## 練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第2回）「キャリア教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成21年6月25日(木) 午後3時30分～午後5時40分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 1201会議室	
出席者	委員	廣嶋憲一郎、小野雅保、石井友行、岡本昌子、安井実、飯塚剛、望月徳生、高橋吉久（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	芝田智昭 指導主事

### 1 はじめに

#### アドバイザー

一体型の学校は、指導資料以前に学校が先手を打ってカリキュラムを工夫して進めているのでよいのだが、一体型ではないところでどうするかは、かなりトーンが違う。どちらかと言うとマイナスの発想で受け止めている向きが強く、小中一貫教育というのがなぜ必要なのかということを周知していくことが、これからの大きな課題だと思っている。

キャリア教育の9年間を見通した子どもの育成が、果たして今までと違った6年・3年で切れるところと、どういうふうに変ったものが出てくるのか。指導方法の接続や発達段階に応じた教育課題ができればかなりの成果が上がるのではないかと思っはいるが、併せて地域の教育力をどこまで活用できるかが極めて重要なことだと思っている。

### 2 提案と意見交換

#### 委員

では持ち寄った資料を10分目安で、順番に紹介いただきたい。

#### 部長

まず一つめ、小学校に中学生がミニティーチャーということで、教師体験をする。2年生、約130人が隣りの上石神井小に行き、1～6年生まですべて、約45分間授業を1人でやる。年に2回、わずか1時間だが、一生懸命やれば小学生なりに応えてくれると、この経験から自分の気持ちを受け止めるのは、キャリア教育のなかのコミュニケーションとか係わりの問題で育成する一つの視点になっていると思う。

それともう一点、6月の12日に関東ブロックの中学校長の協議会があり、キャリア教育に関わる2つの事例の発表があった。使えそうと思ったのが表である。特別活動のなかに職場体験とかキャリア教育的なものの柱や題材があるなかで、学校行事や総合的学習、道徳とどう関わっているかというのが簡単なプロットで書いてある。それも一学年ごとに書いてあって、わかりやすい気がした。もっと綿密なのが「キャリア教育との関連一覧表」。生徒会の行事、各教科、課外活動、そして最後にキャリア教育の4つの軸のところも一応含めてできている。

#### 委員

小中の動きを先進的にかつ長い活動の歴史がある「上石」での実践を広めていったときには、

各学校で共通のものにできる。練馬区内で本当に先鞭を切っていた活動なので大きな影響力を持つだろうということ、そして普段顔を突き合わせる環境になったときに、それをフォローしていく体制も考える必要があると思った。

#### 部長

ただ一緒だからそのままやればよいというものではなくて、小中一貫教育でやるのであれば、それなりの仕掛けをすれば相応の成果も出るのかなと思う。

上石神井中の場合、母体校としては3校で、上石神井小、北小と石神井台小がある。でもできるのは隣同士の学校だからだ。

#### 委員

やっぱり中学校1に対して、小学校はだいたい3校ぐらいある。1対1であれば今のやり方はすごく参考になってくるかと思うが、どういうふうに解消していったらいいのか。

#### 部長

何が大変かと言えば、小学校の先生が全部の授業を組まなきゃいけない。授業の中身を作って、補助で教えてから当日を迎えるから。学校の距離の問題だけじゃない。

#### 委員

地理的な部分や人の交流、特に小中での先生方の交流がうまくいってできるということ。

#### 委員

「職業体験に関する指導上の課題」というのは、練馬区の進路指導部会が実地調査を行って各学校の実践に基づいてまとめたものになる。

2つめの資料は前任校での活動で、職業体験先を探すところから始めた。実施の1週間ほど前に打ち合わせに行く。実習体験先で何を体験したいのか、体験させてもらえるのかのすり合わせをしていく。そういうなかからプランを自分たちで作っていくことが一つのポイント。次に体験が終わったら、そのあとの授業などを通じて新たな商品等を開発してみたりする。

職業体験だけをやればよいというだけではなくて、その前段階、終わってからの活動をサポートする体系として、教科の学習その他を含めてのマスタープランといったようなもの、さらには基本スキルということで情報収集、情報選択、表現技能、言葉の使い方というようなところを柱立てて各教科や学年で分担をしながら指導をするところを取り組みとしてまとめたものになっている。体験場所の広がりとして、高等学校、専修・専門学校等、子どもたちが「自分の将来のためにこうしたものを体験したい」というものを実現させてあげるため、視野に入れておかなければいけない。

#### 委員

職業体験については都会の子なのでファミレスとかコンビニに流れがちだが、アルバイトでは経験できない仕事に体験に行ってもらえるといいと思う。

支援学級の子についてはレベルがあり、年度によっても違う。基本的には、夏休みに希望が

あれば職業体験をさせている。支援学級の子たちは直接就労に関わってくるので、なるべく本人または保護者の希望を聞き取りながら進めていくというスタンスで行っている。

#### 委員

中学校の職業体験に関しては、光が丘四中の野田先生の資料。2年生が2日間、基本的には徒歩で行ける場所。教員あるいは生徒が夏休み前にお願いし、夏休み中に子どもが挨拶に行き、実際は11月に行い、お礼のお手紙、評価。

また、大泉学園中では、1年生で職業実習1日、2年生で福祉実習1日、3年生のこの時期までに上級学校・施設訪問と継続して進めている。都のほうでは職業体験を5日間というが、1週間となると、受け入れる体制のほうがどうしても躊躇するのと、教師側の葛藤もある。

#### 部長

事前の打ち合わせを学年でとる時間はあるのか。一学年百数十名いる子どもたちに対して、学年一丸となって職業体験の事前の準備とその調整をすること。今後、難しくなる。今それで悩んでいる。

#### 委員

子どもたちが選択する際の基準、要素の実態、手ごたえはどうか。

#### 委員

真っ二つに別れる。一つはアルバイト感覚でコンビニ等に気楽に行くというのと、もう一つは普段自分が興味を持って、もっと知りたいという感じと。そのときに、われわれが一言言ってあげたり、目的意識の高い子とそうじゃない子に対しての配慮が必要だと感じる。

#### 委員

小学校での実践例は、ほとんど今までない。実は「キャリア教育って何？」みたいな感じだった。小学校のレベルで考えると、学年が上がるのが楽しみ、人に役立つことがうれしいという体験をきちんとさせてあげることが、キャリア教育につながるのではないかと思った。

本校でやっていることで一番近いと思ったのが、特別活動部が中心になって行っている「ふれあいタイム」である。縦割り活動で小さな子が大きくなったらなりたいたいと思うリーダーをきちんと育てていくこと。中心にいつも6年生を置きたいということ。それから一人でやることの緊張感をきちんと味合わせようということで、1年から6年までの縦割りのグループの中で6年生一人一人が自分の小さなグループを持つ。それが4つぐらい固まって初めてふれあいグループ1班となって、14のグループができる。

年間10回の活動時間で遊ぶということ子どもたちに経験させている。場所は最初から指定され、事前にリーダーの指導をして、計画書を作って実際に遊んで反省をしていくという活動をしている。ふれあいリーダーをやりたいという子が出たことが一番の成果かと思っている。

仕掛けの一つとして、全校が集まった段階でみんなの前で紹介をする。リーダーを育てることによって、「このお仕事はとても大切な仕事なんだ。自分もがんばらなきゃいけないんだ」みたいなことを学校全体で培っていったら。

#### 委員

6年生の中でもリーダーシップをとることが苦手な子はいないか。

#### 委員

それも仕掛けの一つで、6年生自身がよく話し合いをしてうまく配置していく。班一つでも、うまく立ち行かないところを作ってしまったら、一年間苦痛のことになってしまうから、そのグルーピングがとても大切だと徹底して言っている。

#### 委員

特活の指導原理のなかにやっぱり「活動を通して学ぶ」ことがあると思う。場やチャンスを与えることで、それまで見えていなかったことに気がついて、どう動いたらいいのかというのを体験的に学ぶ。それぞれ到達ラインが違うかもしれないが、それなりの成長がある。

#### 部長

今の世代で関わりの問題というのは、すごく問われている。人として認識していない。こういう場で本当に存在を認めることを、こういう関わりでできるんじゃないかという気がする。

#### 委員

昔のような人間の関わりがないから、それを学校で代わりにやっている状況もあると思う。だからいろいろなものの考え方、価値観を受け入れて、それで小集団をどう動かしていくかというところがすごく大事な学びだと思う。

#### 委員

特別支援学級の担任として、小学校の段階でどういう力を身につけさせることが必要なのだろう。縦割りの活動でリーダーになる子には、自分と異なる他者に対してどれだけキャパを広げてアンテナを張ることができるのか、というところが、年齢が上がれば上がるほど必要になってくるし、その資質をいかに子どもたちに育てていかせることができるかを感じていた。

ここに出したのはお別れ遠足でキッザニア東京に行き、ミニ職場体験みたいなものができたこと。小学校と中学校の特別支援学級の担任では、やっぱり進路とか職場開拓というところについての温度差もある。逆の意味での特権意識を持っている子は荷物も運ばない、掃除もしない。そういう子たちが高学年になってしまうと、やっぱりリーダーになれない。人格育成について、小学校段階でもきちんと伝えていくことは、本当に大事なのだと感じている。ただ、社会経験の差が天と地の差もあるような子どもたちを対象にしているのが難しい。

自分のなかで、いま特別支援学級の立場で考えなくてはいけないのは、三つの点。自分の生活の主体者となるということ、社会のなかで役割を担う、小学校段階で夢を持たせること。

#### 事務局

特別支援学級の、特に中学校の先生方にとっては子どもたちの就労が、かなり大きいウェイトを占める。やはり就労について、発達段階や能力・適性に応じて考えさせるというのは当然

キャリア教育の一つであるというふうに私は考える。

また、小学校では就労というのは現在では重くとらえられていないところもあるので、この部会の発信をきっかけに小学校の特別支援学級でもより強く考えて、中学校の段階でよりよい就労に結び付けられたらと思う。この飯塚先生のキッザニア東京での体験は、まさにきっかけになるいい体験なので、ぜひ資料のなかに入れていきたい。

#### 委員

これはぜひ継続してみたいと思う経験だった。小学校6年生でも保育園でも来ていて、すごく幅が広い。障害のある子どもたちに対してもすごく訓練、情報を積んでいる。仕組みを理解するにはいいきっかけになるという感じで受け止めた。

#### 部長

私の場合は情緒の ADL で子どもたちに関わって、すごくゆっくりだけど、そのなかで感性を伸ばすとか作る楽しさとか、学べば学んだだけのものを彼らは作る。就労ありきじゃないと思う。そのなかで就労に結果として結び付くとしたら、やっぱり「社会の一員としての役割を担う」というのがすごく大事だと私は思う。

特別支援学級の子どもであろうがなかろうか、感謝されたり、お礼を言われたり、自分がやったことに対してフィードバックから来る喜びが純粹なところで、私はそこに核があると思う。それがキャリア教育のなかで、本当に大事にしなければいけないところという気がする。

#### 委員

練馬区は今 10 校、特別支援学級がある。ずっと行われてきた練馬方式という特別支援教育は、昔の特殊教育の流れのなかで作業という時間がある。それは、明らかに昔ながら手に職を付けるところでやってきた。小学校にも作業という時間があることの是非は、賛否両論だと思うが、今までそういう意識を持って取り組んできたという実践もある。そういうなかで「練馬区として」という視点になるのか、「学級ごとに」ということになるのか、どういう発信の仕方ができるのか。一般的には「役割を担う」とか集団の中での立ち位置で、社会のなかで生きていくということについての自覚を促すことは大事だと思う。

#### 委員

小学校4年生までは1期、小5から中1が2期、中2、中3が3期ということで整理をしていかなければいけない。

#### 委員

小学校と中学校のくくりで今まで事例の発表があったけれども、そのなかで各1期、2期、3期でこんなところがポイントだという整理の仕方をしていくのかどうか。

あまりにも小学校と中学校が違うので、リトルティーチャーの実践や職業体験など、いろいろな要素のものが混じって紹介され、それぞれ素晴らしい実践だと思ったが、整理していかなければいけないことがあると思った。

#### アドバイザー

いま確認しておきたいと思っていたのは、たとえば特別支援をやっぱりきちんと入れないと、このキャリア部会の存在価値はないかなど。他に特別支援まで触れているところはない。そういう点で、今日貴重な報告があった。小と中の事例を両方入れたいと思うが、これは1期、2期、3期と切っているなかに入れられるのかどうか。

あと中学校の先生方から見ると、小学校の事例は学級経営的な側面を感じてかけ離れるのかなと思うが、自己肯定感というものがないと、単に体験していわゆる進路指導という感じだけでキャリア教育を考えてしまうのは間違いというところがある。極めて大事なベースなのだと思う。特別支援は、特に自立していくプロセスを自覚できるかどうかキャリア教育で重要な要素だ。ベースにこれがあって積み重なって初めて社会の勤労、労働とかに触れたときに適正に自分で職業を選ぶことができる。小学校にも勤労的な部分はあっていいと思う。

小学校版の社会体験的な学習をやっているところもある。3年生の社会科で農家や商店の学習から手伝いをするとところまで発展させるなど、社会科から総合に発展させている事例である。

あとはどういうレベルで指導資料8ページを書けばいいのか。簡単なエクスだけで紹介をして啓発していくという感じの資料になると思う。事例の紹介は正味6ページか。半ページずつカード形式ぐらいの感じで、事例を紹介していくようになるのか。

#### アドバイザー

キャリア教育は、本当に地域と密接な関わりのなかで子どもを育てていくというイメージが出せるのでいいなと思っている。

#### 委員

支援学級の立場として、やはり就労が中学校においてすごく大きな課題で、社会に出たときに生徒が困らないように働いていくために、数学であれば税金何%とか、われわれが何気なく過ごしているところに視点をあてながら、授業のカリキュラムを組んでやっていて、それをマニュアル化できないかと学校で話しているところだ。それがうまくいけば、どこの学校に行っても同じ教育が受けられる。いま中学の支援学級で、生徒数のアンバランスさが問題としてあがっている。その理由の一つに、教科カリキュラムの違いによって保護者が学校を分けているのではないかと。そういうことがないようにしていかなければという課題がある。

それから障害者の就労率が低い。障害者本人も自覚し、できない部分をきちんと教えていくことはすごく大事であり、また地域に障害者を理解してもらって地域で雇用してもらおうというようなスタンスがとれていけばよいのでは。そのために教員としては地域に障害を理解してもらい、マニュアルや子どもへの支援カードを準備して送り出していく。これは多分支援学級の生徒だけじゃなくてもちょっと近いところがあるのかなという感じがあるので、利用してもらえるといいのかと思う。

#### 委員

キャリア教育部会は9年間を見通して、指導法をなだらかにつなげていくことや課題を克服していくこと、それから地域の教育力というお話が最初にあったが、今日はっきりしたことは、「特別支援」というキーワードが入ってくると感じている。

**部長**

学習期が小1から小4、小5から中1、中2から中3と、通常の学級における学習課題が達成したかたちの段階の分け方ではなく、特別支援学級の子どもたちにも配慮したものにならないと関わりというのは難しいという感じがする。

**事務局**

特別支援学級の子どもたちは年齢ではなくて、個人個人の状況だから、1期、2期、3期でやると全く当てはまらないと私も考える。だから実践を入れるとしたら「このあたりで可能ではないか」くらいの押さえでも構わないのではないかな。

**部長**

そうすると学習期における目指す子どもの姿というのが、特別支援学級の子どもの姿はどこに出るか難しい。

### 3 次回に向けて

**事務局** 野田先生と根本先生と望月先生にご説明いただき、3事例についての情報共通を図ったあとに、ある程度のたたき台を作ってきていただきたい。私は、(4)の②の「部会で重視する指導項目」を作ってきてほしい。石井先生には(4)の①だけでも結構ですし、(5)のマトリックス、カリキュラムの表組みの入れられるところだけでもお願いできれば。安井先生には、(1)、(2)、(3)あたりをご提案いただきたい。

**委員**

少し今までの実践で。本部会としては、IVで、1がキャリア教育の推進というのが1で。(4)の③の「キャリア教育カリキュラムの教育課程上の位置付け」というのとタイアップしてもよいか。

[次回日程]

\* 7月22日、水曜日、15時30分

\* 8月31日、月曜日、15時30分